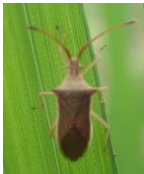


病害虫発生予察情報予報第 4 号（8 月の予報）

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	8月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のて びきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
水稲 (早期)	紋枯病	並	並	143～144	 紋枯病
	斑点米カメムシ類	並	並	161～162 180～183	
水稲 (早植え)	穂いもち	並	やや多	137～142	 斑点米カメムシ類
	紋枯病	並	並	143～144	
	トビイロウンカ	やや多	多	152～154	
	コブノメイガ	並	やや多	159～160	
	斑点米カメムシ類	並	並	161～162 180～183	
水稲 (普通期)	穂いもち	並	並	137～142	 トビイロウンカ
	紋枯病	並	やや多	143～144	
	白葉枯病	並	並	148～149	
	もみ枯細菌病	やや多	並	144～146	
	トビイロウンカ	やや多	多	152～154	
	コブノメイガ	並	やや多	159～160	
	フタオビコヤガ	並	並	172～173	
	斑点米カメムシ類	並	並	161～162 180～183	
水稲全般	1. トビイロウンカ 本年は、断続的に飛来がみられている。田植え時期、地域、水稲の品種、これまでの防除歴等の違いによってウンカの発生量は異なるので、発生予測図（共通-図1）を参考にして、必ず圃場における発生状況を調査し、適期防除を実施する（詳細は、7月24日付病害虫対策資料第3号を参照）。				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	8月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
イチゴ(育苗圃)	ハダニ類	やや多	やや多	208～209	 ハダニ類
	うどんこ病	並	並	198～200	
	苗立枯症 (炭疽病・疫病)	並	並	202～207	
	アブラムシ類	並	並	213～214	
	1. ハダニ類 一部の圃場で発生が多い。本圃での発生を抑えるため、育苗期の防除を徹底する。薬剤防除には、薬剤抵抗性の発達が少ないとされる気門封鎖系薬剤も活用する。ただし、これらの薬剤は卵に対して効果が無いものが多いため、5～7日間隔で計2回を1セットとして散布する。 2. 苗立枯症(炭疽病、疫病、萎黄病) ランナー切り離し後の親株は、できるだけ早期に処分する。ビニル雨よけや水滴の小さい灌水装置を利用して、水はねによる菌の飛散を防ぐ。また、発病株の発生を認めた場合は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。				
アスパラガス	茎枯病	やや少	並	313～314	 ハダニ類
	褐斑病	並	並	314～315	
	斑点病	やや少	並	314	
	アザミウマ類	やや多	やや多	317～318	
	ハダニ類	並	少	318～319	
	1. アザミウマ類 本種の多発生傾向が続いている。若茎及び親茎への本虫による被害を防ぐため、虫見板(約20×30cm)への払い落とし(擬葉部を2～3回叩く)を行い、成虫が1ヶ所当たり3頭以上認められる場合は薬剤防除を実施する。 2. ハダニ類 一部の圃場で発生がみられる。多発生すると防除が困難となるため、発生初期での防除を徹底する。虫見板への払い落としを行い、寄生が認められれば直ちに薬剤防除を行う。 3. 疫病(冠水害対策) 7月20～21日の降雨により冠水した圃場では、若茎に疫病が発生する可能性があるため注意する。発生がみられた場合は、被害茎の除去及び薬剤防除を実施する。 4. 薬剤散布時の注意点 茎葉が繁茂すると薬液が内部まで到達しにくいので、外側からに加え、株内に差し込むなどして丁寧に散布する。				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	8月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
果樹全般	果樹カメムシ類	やや少	少	240～243	 チャバネアオカメムシ
	1. 果樹カメムシ類 果樹園への飛来開始時期は9月1半旬頃と予想されるが、地域によっては早期に果樹園へ飛来し、被害を及ぼす可能性がある。当センターでは8月上旬に再度ヒノキ毬果における寄生虫数および口針鞘数の調査を行い、対策資料として発表予定であるため、本情報を確認するとともに、園内外をこまめに見回り、早期発見、早期防除に努める。				
カンキツ	かいよう病	並	並	213～215	
	黒点病	やや少	やや少	211～213	
	ミカンハダニ	並	並	234～236	
	チャノキイロアザミウマ	並	並	229～233	
	1. ミカンサビダニ 新たに被害が確認された場合は早急に防除を行うとともに、例年多発する園では、8月中下旬頃の防除を徹底する。 2. アザミウマ類 チャノキイロアザミウマによる後期被害を防ぐために、8月中旬～9月上旬頃の防除を徹底する。また、近年ミカンキイロアザミウマやハナアザミウマ類による着色期の果実被害が多くなっているため、発生源となる園内及び園周囲の雑草は、着色期前までに除草を行う。				
ナシ	ナシヒメシンクイ	並	並	293～295	
	ハダニ類	やや多	並	298～300	
	1. 夜蛾類 被害を防止するため、忌避灯を点灯する時間及び点灯時の園内の明るさに注意する。 2. 薬剤散布時の注意点 スピードスプレーヤーによる散布では薬液が到達しにくい園周縁部等でチュウゴクナシキジラミの発生が多い圃場が散見されている。また、ハダニ類もこれらの部位では散布ムラにより生き残りやすく、その後急激に増加することがあるため、手散布を実施するなどして防除の徹底を図る。				
ブドウ	べと病	並	並	330～332	
	褐斑病	並	やや多	332～333	
	1. べと病、褐斑病 これらの病害が発生している圃場では、早急に防除を徹底する。なお、スピードスプレーヤーによる薬剤散布時には、全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	8月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	多	多	413～414	 カンザワハダニ
	クワシロカイガラムシ	やや少	並	420～421	
	チャノキイロアザミウマ	やや多	多	419～420	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	418～419	
	チャノコカクモンハマキ	並	並	417～418	
	チャノホソガ	やや少	並	416	
	炭疽病	並	やや多	408～409	
	輪斑病	並	やや多	406	
	1. カンザワハダニ 秋芽生育期にハダニが多発すると母枝の充実が不足するため、圃場ごとに発生を確認し、発生を認めた場合は直ちに防除を実施する。 2. チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ 一部圃場で発生が多い。秋期の発生を抑えるため、秋芽萌芽期～開葉初期に防除を実施する。多発生園では、さらに一週間後を目安に、追加防除を行う。なお、同一系統の薬剤は連用しない。 3. チャトゲコナジラミ 成虫期防除は効果が劣るため、園内の発生状況をよく観察して、成虫が見られなくなった頃（若齢幼虫期）に防除を実施する。				

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

Ⅱ. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平成（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

8 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 8 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 3 ヶ月予報（令和元年 7 月 24 日）を基に、「気温：平年並」、「降水量：平年よりやや多い」と判断しています。

気象予報による要素別確率（％）及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3 ヶ月予報における 8 月の気象予報（確率予報％）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	20	40 (27.8℃)	40	やや高
降水量	40	30 (207 mm)	30	並

Ⅲ. 8月の予報

水稻（早期、上場地域）

定期調査：12圃場
調査日：7月19日



定期調査圃場の様子（早期水稻）

1. 紋枯病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 0%（平年2.1%、前年2.0%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：やや少（-～±）

(2) 8月の気象予報

気温はやや高く、降水量は平年並で、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

各圃場での発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

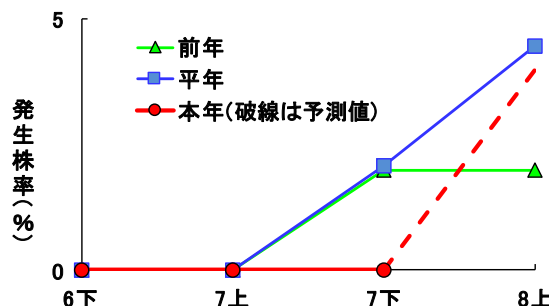


図1 早期水稻での紋枯病の発生推移

2. 斑点米カメムシ類

水稻（早植え）の斑点米カメムシ類の項参照。

水稻（山間早植え）

定期調査：16圃場
調査日：7月18日



定期調査圃場の様子（早植え水稻）

1. 穂いもち

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）【葉いもち】

発生株率 0.5%（平年7.5%、前年1.0%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

(2) 8月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 進展型病斑がみられる圃場では早急に薬剤防除を行う。

(2) 葉いもちの発生がみられる圃場では、穂ばらみ期の防除を実施する。発生が多いと予想される場合には穂揃い期にも薬剤防除を行う。

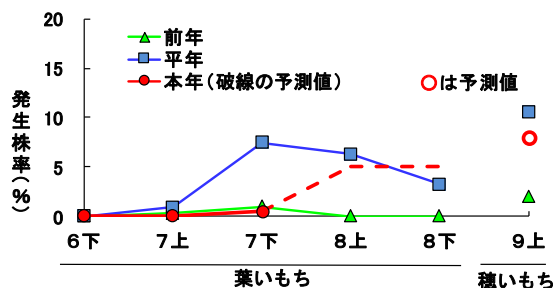


図1 山間早植え水稻でのいもち病の発生推移

2. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生株率 0%（平年 0.1%、前年 0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 8月の気象予報

気温はやや高く、降水量は平年並で、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

本病の発生が見られる圃場では、病斑が上位の葉鞘に進展する前に防除を行う。

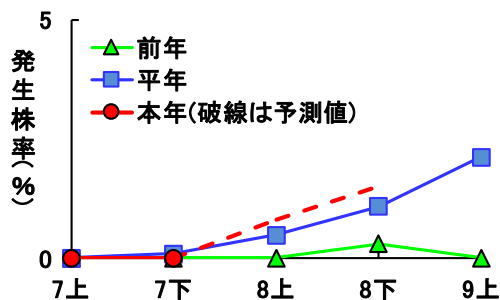


図1 山間早植え水稻での紋枯病の発生推移

3. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) トビイロウンカの飛来状況

嬉野市のライトトラップでの6月1日から7月25日

までの総捕獲数（本年は7月22日まで）は（共通-表1）、10年間（2010～2019年）の中で、2番目に多い。（+）

(2) トビイロウンカの発生状況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 0%（平年0.2%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(3) セジロウンカの飛来状況

セジロウンカの飛来量が少ない年は、トビイロウンカの増殖率が高まる傾向にある。このような中、本年は、セジロウンカの飛来量が少なく、トビイロウンカの増殖に好適な条件となっている。（+）

(4) 8月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

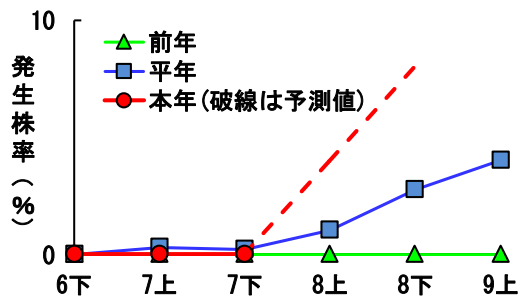


図1 山間早植え水稻でのトビイロウンカの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生予測図（共通-図 1）を参考にして、必ず圃場における発生状況を調査し、幼虫ふ化揃い期（防除適期）に防除を徹底する。

(2) 本虫は株元に生息しているため、薬剤は株元にむらなくかかるように、十分量を丁寧に散布する。

4. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) これまでの飛来状況

県内のフェロモントラップでは6～7月に断続的に誘殺されている一方で、ライトトラップには誘殺されていない（共通-表1）。（±）

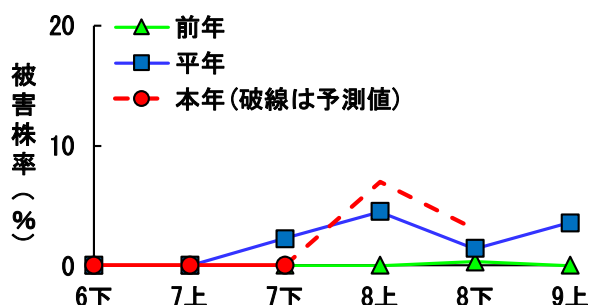


図1 山間早植え水稻でのコブノメイガの発生推移

(2) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率 0%（平成 2.2%、前年 0%）

平成比：やや少（－～±） 前年比：並（±）

(3) 8月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～＋）

3) 防除上注意すべき事項

止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、発生予測図（共通-図2）を参考に、必ず圃場における発生状況を確認し、発蛾最盛期の7日後（幼虫ふ化揃い期）に防除を実施する。

5. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、アカスジカスミカメ、ミナミアオカメムシ等）

1) 予報の内容

発生量：平成並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) イネ科植物での捕虫網によるすくい取り調査（7月16～22日）

発生量は、平成並（表1）。〈±〉

(2) 8月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～＋）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 水稻の出穂10日前までに畦畔を含めて除草を行う。

(2) 乳熟期（穂揃い期の約10日後）を中心に薬剤防除を行う。多発生の場合は穂揃い期とその7～10日後に薬剤防除を行う。

表1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数（2019年7月16～22日）

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ類		アカスジカスミカメ		ミナミアオカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	
佐賀市川副町	道端	イノコグサ類	0	0	0	0	0	0	1	0	0
唐津市鎮西町	空き地	イノコグサ類	3	0	4	0	0	0	0	0	0
唐津市肥前町	空き地	イノコグサ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
伊万里市東山代町	空き地	イノコグサ類	18	12	0	0	1	0	0	0	0
多久市南多久町	空き地	イノコグサ類	0	0	0	0	2	5	2	2	0
武雄市橘町	道端	イノコグサ類	0	11	2	0	0	0	0	0	0
鹿島市常広	空き地	イノコグサ類	0	0	0	0	0	0	9	4	0
嬉野市嬉野町	空き地	イノコグサ類	16	0	3	0	0	0	3	0	0
嬉野市塩田町	空き地	ヒエ類	0	0	0	0	0	0	9	0	0
神埼市神埼町	道端	イノコグサ類	0	0	1	0	1	0	1	0	0
吉野ヶ里町箱川	空き地	イノコグサ類	1	0	0	0	1	0	3	1	0
玄海町	道端	イノコグサ類	0	2	0	0	0	0	0	0	0
白石町福田	道端	ヒエ類	0	0	0	0	0	0	4	1	0
白石町新明	道端	イノコグサ類	0	0	1	0	0	0	7	1	0
本年（平均）			2.7	1.8	0.8	0.0	0.4	0.4	2.8	0.6	0.0
前年（平均）			1.1	3.3	2.1	0.7	0.4	1.1	12.5	0.5	0.0
平成（過去10年の平均）			2.3	4.2	1.0	0.6	0.3	0.6	14.6	8.5	0.03

水稻（普通期）

定期調査：48 圃場
調査日：7 月 16 日～22 日



定期調査圃場の様子（普通期水稻）

1. 穂いもち

【概要に戻る】

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①定期調査（図1参照）【葉いもち】

発生株率 0.2%（平年2.5%、前年 0.5%）

平年比：やや少（一～±） 前年比：並（±）

(2) 感染好適条件発生状況

県内及び隣接県の観測地点計11地点におけるBLASTAM（7月6日～23日）では、感染および準感染好適条件が、7月9～10日、7月14日に広域に出現した（表1、図2）。（±～+）

(3) 8月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

水稻（早植え）の穂いもちの項参照。

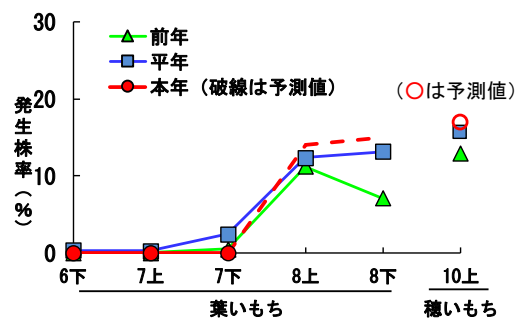


図1 普通期水稻でのいもち病の発生推移

表1 BLASTAMによる葉いもち感染好適条件の出現状況

月	日	佐賀						福岡			長崎	
		唐津	伊万里	佐賀	嬉野	白石	川副	前原	大宰府	久留米	松浦	佐世保
7月	6日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	7日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	8日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	9日	—	—	2	—	—	10	—	—	—	—	10
	10日	10	10	—	10	10	—	—	10	—	10	10
	11日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	12日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	13日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	14日	10	4	10	10	—	10	10	10	10	4	10
	15日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	16日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	17日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	18日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	19日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	20日	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—
	21日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	22日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	23日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	24日											
	25日											
	26日											
	27日											
	28日											

1：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が20℃未満）

2：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が25℃以上）

3：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤期間中の平均気温が15～25℃の範囲外）

4：準好適条件（湿潤時間が湿潤期間中の平均気温ごとに必要な時間数より短い）

10：好適条件（湿潤時間が長く気温も適当で、葉いもちの感染好適条件が出現した）

—：好適あるいは準好適条件の出現なし

？：判定不能

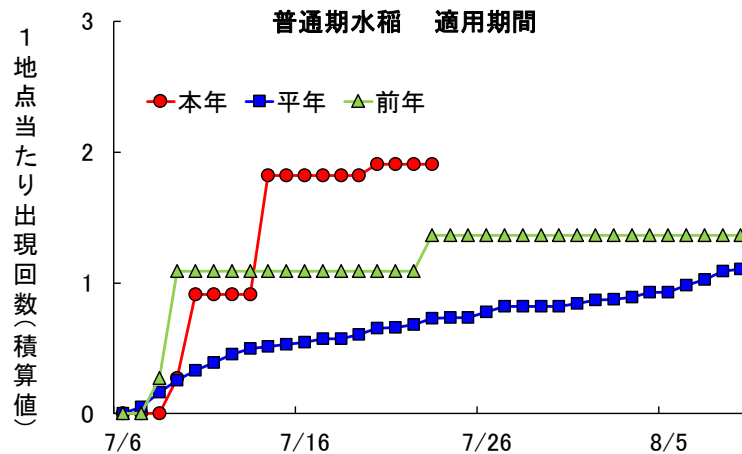


図2 BLASTAMによる準感染・感染好適条件の出現回数
(6月16日移植の場合: 適用期間7月6日～8月9日)

2. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率 0% (平年0.0%、前年0%)

平年比: 並 (±) 前年比: 並 (±)

(2) 8月の気象予報

気温はやや高く、降水量は平年並で、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

本病が発生している圃場では、病斑が上位葉の葉鞘に進展する時期 (液剤、粉剤の場合は出穂10~20日前を目安とする) に防除を行う。

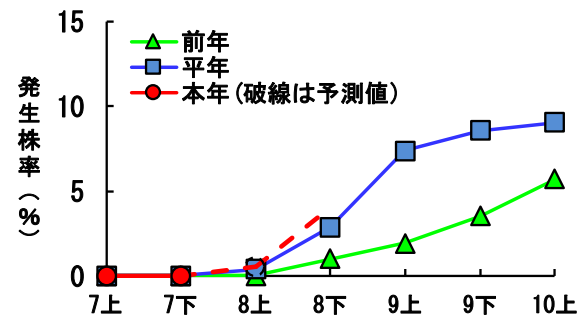


図1 普通期水稻での紋枯病の発生推移

3. 白葉枯病

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年並)

2) 予報の内容

(1) 発生の現況

① 定期調査

発生株率 0% (平年0.0%、前年0%) 平年比: 並 (±) 前年比: 並 (±)

(2) 8月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 昨年、発生がみられた圃場か、本年の7月下旬に浸冠水した圃場では発生に注意する。

(2) 台風等の強風雨後に発生しやすい。発生した場合には拡大を防ぐため葉が乾くまで圃場に入らない。

4. もみ枯細菌病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 育苗期の発生状況

県内の複数の苗床で発生を認めた〈±〜+〉

(2) 8月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

気象予報に留意し、開花期間中に降雨が予想される場合は、出穂前後3日の間にスターナ剤による防除を行う。特に、苗床で発生した圃場では、確実に実施する。

5. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) トビイロウンカの飛来状況

嬉野市のライトトラップでの6月1日から7月25日までの総捕獲数（本年は7月22日まで）は（共通-表1）、10年間（2010～2019年）の中で、2番目に多い。〈+〉

(2) トビイロウンカの発生状況

①定期調査(図1参照)

発生株率 0%（平年0.04%、前年0%） 平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

②捕虫網によるすくい取り調査

県内西部以外の平坦部の水田においても、トビイロウンカ成虫の発生を確認している。

(3) セジロウンカの飛来状況

セジロウンカの飛来量が少ない年は、トビイロウンカの増殖率が高まる傾向にある。このような中、本年は、セジロウンカの飛来量が少なく、トビイロウンカの増殖に好適な条件となっている。〈+〉

(4) 8月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件〈±〜+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生予測図（共通-図1）を参考にして、必ず圃場における発生状況を調査し、幼虫ふ化揃い期（防除適期）に防除を徹底する。

(2) 本虫は株元に生息しているため、薬剤は株元にむらなくかかるように、十分量を丁寧に散布する。

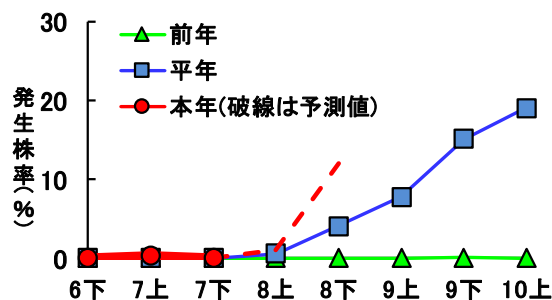


図1 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移

6. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) これまでの飛来状況

県内のフェロモントラップでは6～7月に断続的に誘殺されている一方で、ライトトラップには誘殺されていない（共通-表1）。〈±〉

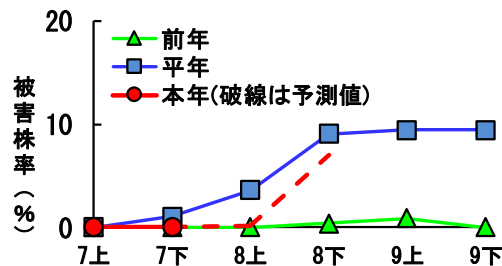


図1 普通期水稻でのコブノメイガの発生推移

(2) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率 0.2% (平年1.1%、前年0%)

平年比: やや少 (―～±) 前年比: 並 (±)

(3) 8月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件 (±～+)

3) 防除上注意すべき事項

水稻 (早植え) のコブノメイガの項参照。

7. フタオビコヤガ(イネアオムシ)

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査

発生株率 0% (平年0.05%、前年0%)

平年比: 並 (±) 前年比: 並 (±)

(2) 8月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件 (±～+)

3) 防除上注意すべき事項

8月中～下旬頃に圃場における発生状況を確認し、上位葉に多数の幼虫が認められる場合には防除を実施する。

8. 斑点米カメムシ類

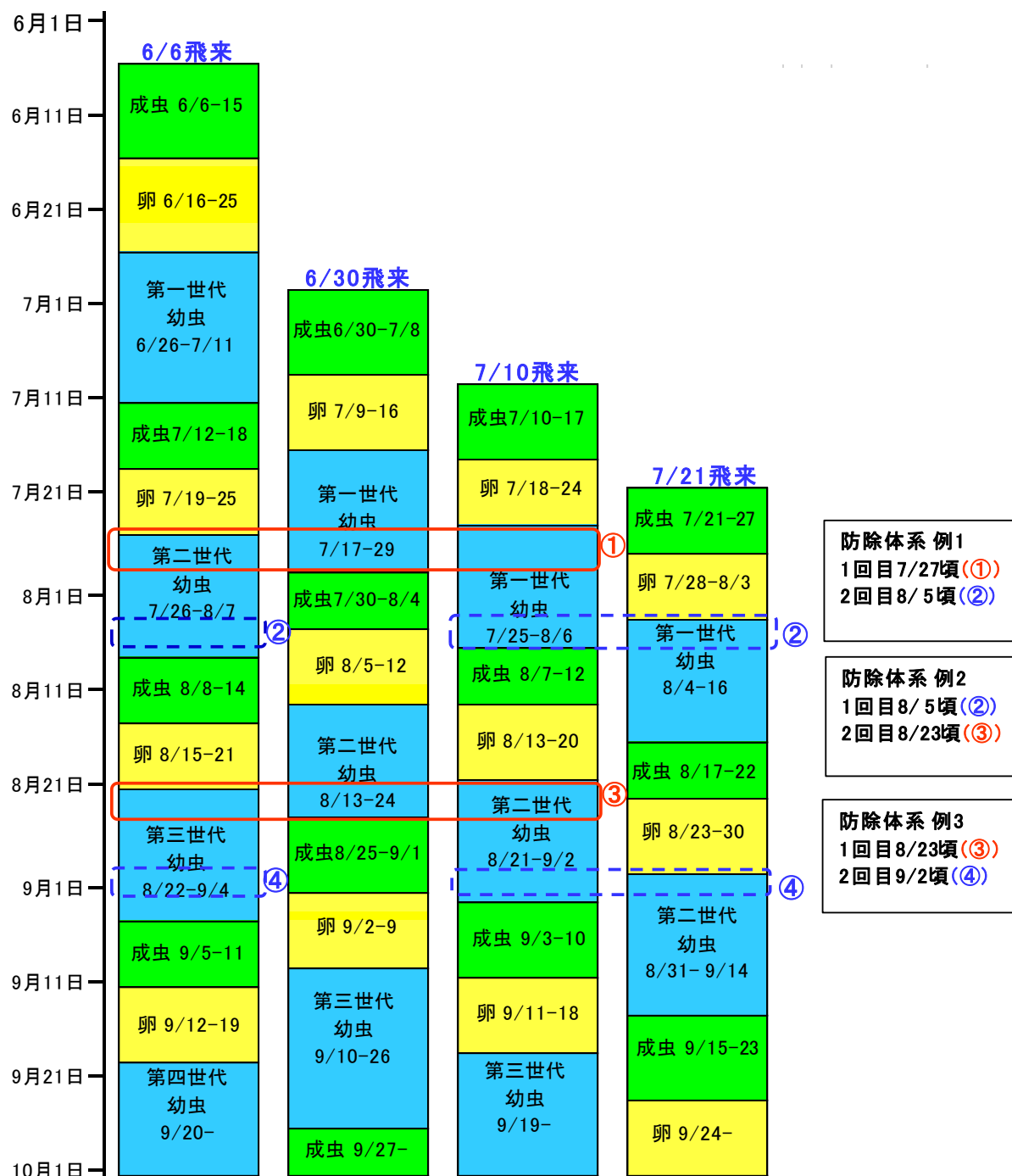
水稻 (早植え) の斑点米カメムシ類の項参照。

共通-表1 イネウンカ類・コブノメイガのトラップ捕獲状況(2019年)

月	日	トビイロウンカ						セジロウンカ						コブノメイガ									
		佐賀県			長崎県			佐賀県			長崎県			佐賀県						長崎県			
		佐賀市	佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	諫早市	佐賀市	佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	諫早市	佐賀市	佐賀市	神埼市	伊万里市	白石町	武雄市	諫早市	諫早市		
	ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップA	ネット トラップB	ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップA	ネット トラップB	フェロモン トラップA	フェロモン トラップB	粘着トラッ プ(20W 蛍光灯)	粘着トラッ プ(20W 蛍光灯)	粘着トラッ プ(20W 蛍光灯)	粘着トラッ プ(20W 蛍光灯)	フェロモン トラップA	フェロモン トラップB		
6月	1日	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	2日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	3日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	4日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	5日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	6日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	7日	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33	0	0	
	8日	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	0	0	0	11	0	0	
	9日	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	5	0	0	
	10日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	28	0	0	
	11日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	0	0	0	0	3	0	0	
	12日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	8	0	0	
	13日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	0	0	0	0	0	0	0	
	14日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	
	15日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	1	0	0	
	16日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	4	0	0	
	17日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	1	0	0	
	18日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	19日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	20日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	21日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	22日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
	23日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	
	24日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
	25日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
	26日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	27日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	28日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	29日	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	30日	0	0	19	0	0	0	1	0	0	17	13	0	0	13	0	0	0	0	1	2	0	
7月	1日	0	0	6	1	0	0	0	0	11	8	0	0	4	0	0	0	0	0	4	1	0	
	2日	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	0	0	5	0	0	0	0	0	0	2	0	
	3日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	7	0	0	0	0	2	2	0	0	
	4日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	2	0	0	
	5日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	
	6日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
	7日	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	7	0	0	0	0	2	0	0	0	
	8日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	9日	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	
	10日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	11日	0	0	3	0	0	0	0	0	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	
	12日	0	0	7	5	0	0	0	3	2	2	0	0	0	0	0	0	0	1	6	0	0	
	13日	0	0	3	1	0	0	0	0	1	1	0	0	3	0	0	0	0	0	3	0	0	
	14日	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	0	0	1	0	0	0	0	2	7	0	0	
	15日	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2	0	0	
	16日	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	
	17日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	
	18日	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	
	19日	0	0	2	0	0	0	0	0	3	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
	20日	—	0	0	0	0	—	—	0	2	74	3	—	6	0	—	0	0	4	0	0	0	
	21日	0	0	65	0	0	0	0	0	165	12	0	0	13	0	0	0	0	0	0	0	0	
	22日	0	0	8	—	—	—	0	0	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

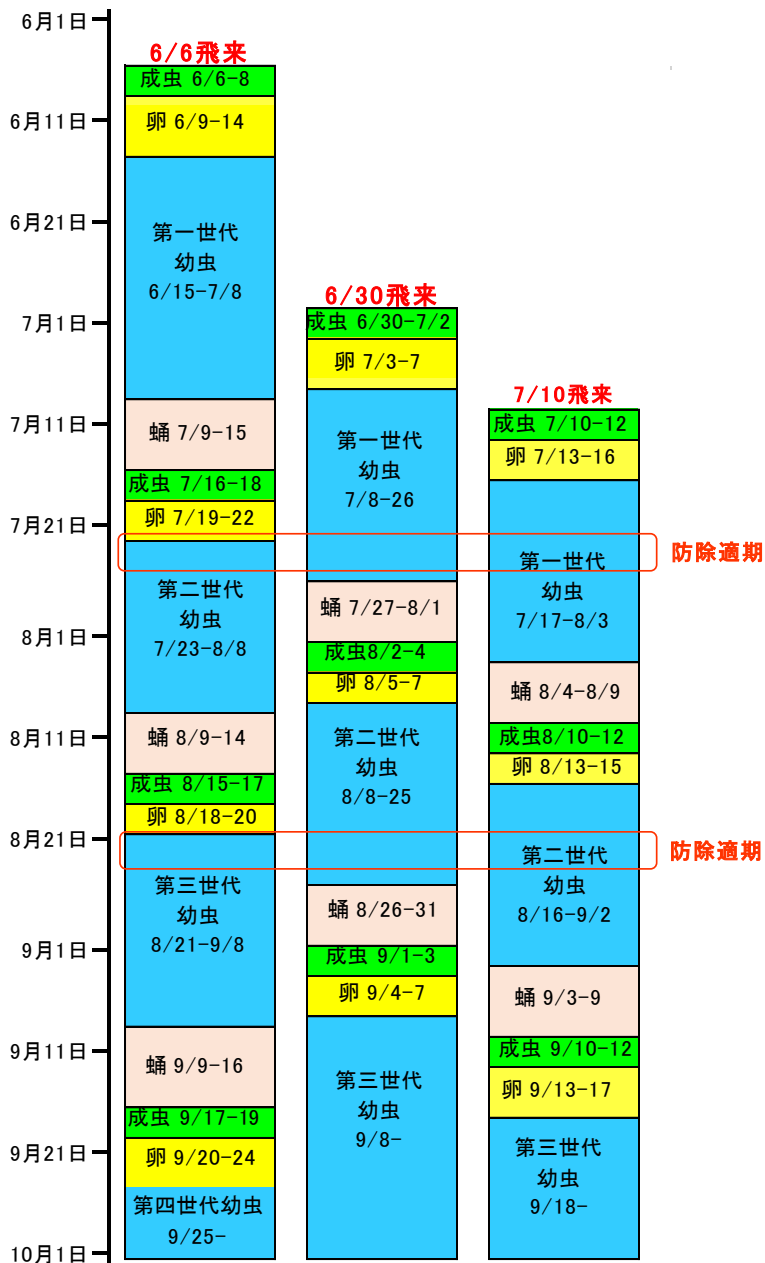
注1) ネットトラップと予察灯(ライトトラップ)は、農業試験研究センターで調査。嬉野予察灯は農業技術防除センターで調査。

注2) コブノメイガ：神埼市、白石町、伊万里市、武雄市は防除員が調査。佐賀市のフェロモントラップは農業試験研究センターで調査。
長崎県のデータは、長崎県病害虫防除所提供。



共通-図1 トビイロウンカ各世代の発生予測(第4版、2019年7月24日作成)

1. 6月6～7日頃(図では6月6日)、6月30日頃、7月10～11日頃(図では7月10日)、7月21日頃に飛来したウンカを起点とし、有効積算温度と佐賀市川副町の気温データ(7月23日以降は平年値)を基に作成した。
2. 普通期水稻には、6月6日飛来虫は定着していないと考えられる。また、早植え水稻の場合、7月21日飛来虫の第三世代幼虫が増殖する前に収穫されると考えられる。これらの例のように、各飛来波に対する防除の重要度は、田植え時期によって異なる。
3. 本種に対しては、幼虫ふ化揃い期の防除効果が最も高い。しかし、本年は断続的に飛来がみられたことから、飛来波ごとの幼虫の出現時期は異なると予想される。複数の飛来波の幼虫を、より効率的に防除可能と考えられる時期として「6/6、6/30、7/10飛来波を対象とした場合を実線赤枠(①、③)」「6/6、7/10、7/21飛来波を対象とした場合を点線青枠(②、④)」で示した。さらに、全ての飛来波を対象とした場合の体系防除の例(1～3)を、本図の右側に示した。
4. 田植え時期に加え、地域、水稻の品種、これまでの防除歴等の違いによってウンカの発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
5. 今後の飛来状況、気象経過に応じて、本図は更新する。最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。



共通-図2 コブノメイガ各世代の発生予測(第4版、2019年7月24日作成)

1. 6月6～7日頃(図では6月6日)、6月30日頃、7月10～11日頃(図では7月10日)に飛来したコブノメイガを起点とし、有効積算温度と佐賀市川副町の気温データ(7月23日以降は平年値)を基に作成した。

2. コブノメイガに対しては、幼虫ふ化揃い期(発蛾最盛期の1週間後)の防除効果が最も高い。しかし、本年は断続的に飛来がみられたことから、飛来波ごとの幼虫の出現時期は異なると予想される。このため、1回の散布で全ての飛来波のコブノメイガを完全に防除することは困難であるが、複数の飛来波の幼虫を、より効率的に防除可能と考えられる時期を、防除適期(赤枠)として図示した。

3. 田植え時期、地域、水稻の品種等の違いによってコブノメイガの発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。

4. 今後の飛来状況、気象経過に応じて、本図は更新する。最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

イチゴ（育苗圃）

（定期調査 10 圃場）
調査日：7 月 16～22 日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

【概要に戻る】

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図 1 参照）

発生株率：8.8%（平年 7.1%、前年 6.5%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 8 月の気象予報

気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。

(2) その他については、特記事項を参照する。

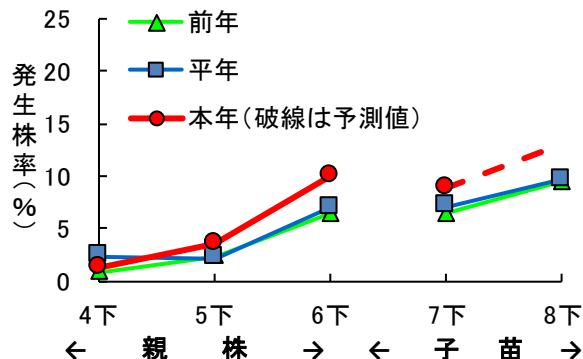


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図 1 参照）

発生株率：8.8%（平年 12.6%、前年 4.7%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 8 月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 定期的な薬剤防除を実施する。

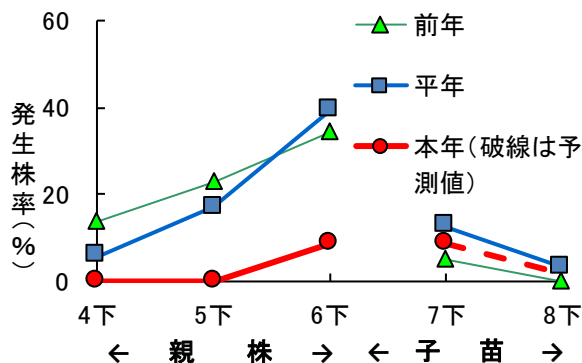


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図 1 参照）

発生株率：0%（平年 0%、前年 0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 8 月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

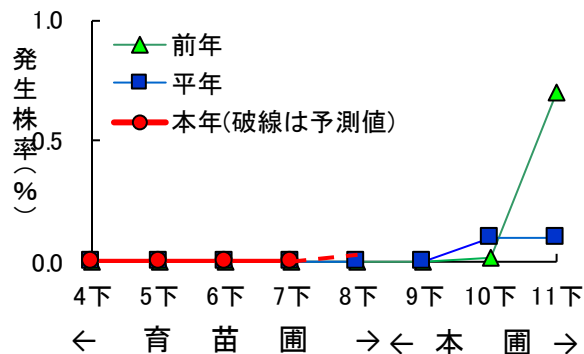


図1 イチゴ立枯症の発生推移

アスパラガス

定期調査：8 圃場
調査日：7 月 16～22 日



1. 褐斑病

【概要に戻る】

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生茎率：1.9%（平年 2.6%、前年 0.6%）

平年比：並<±> 前年比：並<±>

(2) 8 月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件<±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 降雨時以外は施設開口部を開放し通風を図るとともに、3 週間間隔を目安とし発生前から薬剤防除を実施する。なお、既発生圃場及び前年多発生圃場、降雨日が続く場合は散布間隔を短縮する。

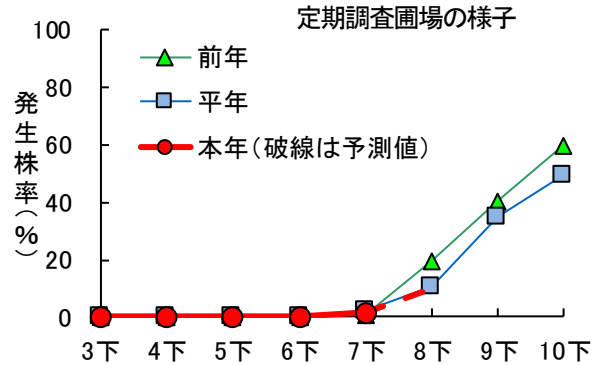


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率：26.3%（平年 19.7%、前年 30.0%）

平年比：やや多<±～+> 前年比：並<±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

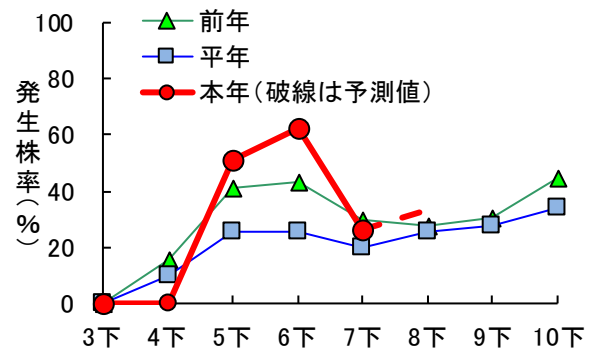


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

果樹全般

1. カメムシ類

【概要に戻る】

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年より少ない）

果樹園への飛来開始予想時期：県平均9月1半旬（早い地域は8月5半旬頃）

2) 予報の根拠

(1) 5月1半旬～7月4半旬までの誘殺量

①予察灯（図1 参照）

平年比：並<±> 前年比：やや少<一～±>

②フェロモントラップ（図2 参照）

平年比：少<一> 前年比：少<一>

(2) ヒノキ毬果における寄生数（図3、表1 参照、7月16～22日調査）

成幼虫数平均：5.1頭（平年 10.0頭、前年 26.7頭） 平年比：やや少<一～±> 前年比：少<一>

(3) ヒノキ毬果における口針鞘数（図4、表1 参照、7月16～22日調査）

口針鞘数平均：1.0本/果（平年 1.7本、前年 7.8本） 平年比：並<±> 前年比：少<一>

(4) 8月の気象予報

気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件〈±～＋〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果樹カメムシ類は、樹高の高い樹木に一旦飛来し、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くないよう剪定をする。
- (2) 合成ピレスロイド剤等を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖(リサージェンス)を生じる場合があるので、これら害虫の防除対策も実施する。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

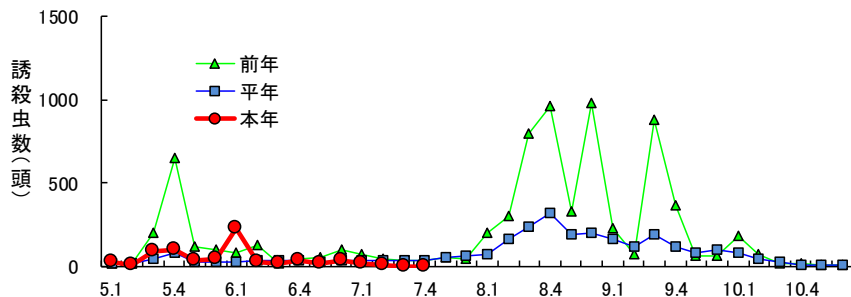


図1 予察灯(佐賀市、太良町(病害虫防除員調査)、小城市(果樹試験場調査))による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

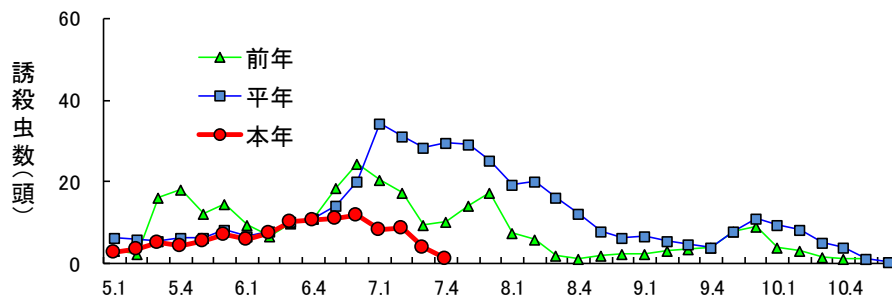


図2 フェロモントラップ(鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、基山町(病害虫防除員調査)、小城市(果樹試験場調査)、唐津市鎮西町(上場営農センター調査))による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

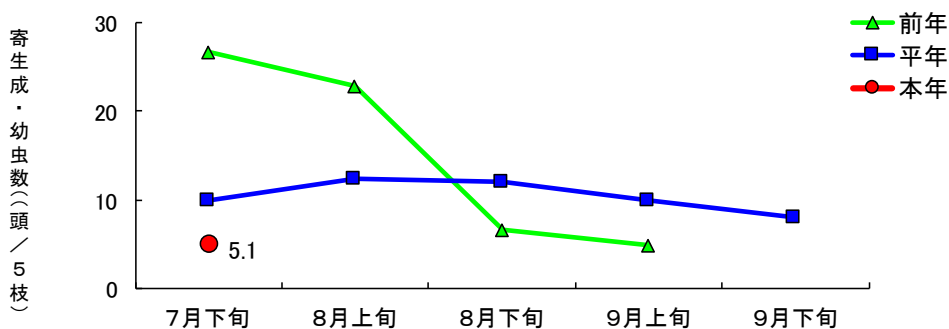


図3 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生数の推移(図中の7月下旬の数値は本年値)

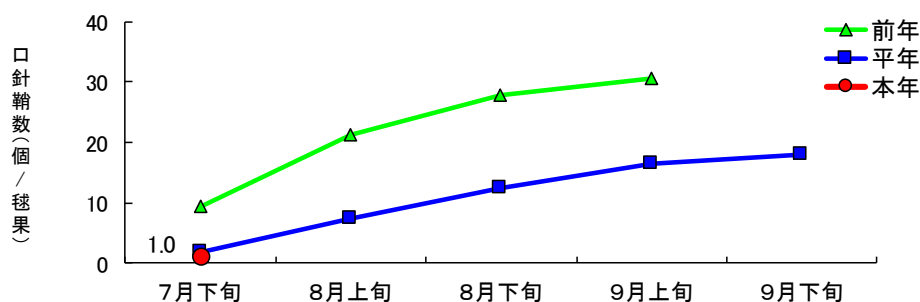


図4 果樹カメムシ類によるヒノキ毬果の口針鞘数の推移(図中の7月下旬の数値は本年値)

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生虫数および口針鞘数(図3、4に関する地点別の状況)
(調査日:7月16~22日)

No.	調査地点	ヒノキ毬果における寄生 状況 ¹⁾			ヒノキ毬果 ²⁾ 着果程度	口針鞘数 ³⁾	離脱予想時期 ⁴⁾ (各調査日から 算出)
		成虫	幼虫	合計		7月下旬	
1	上 峰 町	2	0	2	中	1.0	9月1半旬頃~
2	神 埼 市	0	1	1	中	0.6	9月2半旬頃~
3	小 城 市	6	3	9	多	2.2	8月6半旬頃~
4	多 久 市	3	14	17	中	3.7	8月5半旬頃~
5	唐 津 市 1	4	3	7	中	0.6	9月3半旬頃~
6	唐 津 市 2	10	1	11	多	0.8	9月3半旬頃~
7	伊 万 里 市 1	2	0	2	やや多	0.7	9月2半旬頃~
8	伊 万 里 市 2	2	1	3	やや多	2.0	9月1半旬頃~
9	伊 万 里 市 3	6	0	6	やや少	1.5	9月1半旬頃~
10	白 石 町	5	0	5	多	0.6	9月2半旬頃~
11	鹿 島 市 1	0	0	0	中	0.2	9月2半旬頃~
12	鹿 島 市 2	0	0	0	多	0	9月2半旬頃~
13	鹿 島 市 3	0	1	1	少	0.1	9月2半旬頃~
14	太 良 町 1	7	5	12	多	1.1	9月2半旬頃~
15	太 良 町 2	0	0	0	やや多	0	9月2半旬頃~
	平 均	3.1	1.9	5.1	やや多	1.0	9月1半旬頃~ ⁵⁾
	平年	-	-	10.0		1.7	-
	前年(H30年)	5.5	21.2	26.7		7.8	-

1)たたき落としによる調査

2)ヒノキ毬果着果程度:福岡農総試の達観調査法(一部改変)に基づいて調査

- ・極少:ほとんど結実が見あたらない
- ・少:梢頭部にわずかに結実
- ・やや少:梢頭部から中央部周辺にかけて結実した樹と梢頭部にわずかに結実した樹が混在
- ・中:梢頭部から中央部付近にかけて結実
- ・やや多:梢頭部から最下部にかけて全面的に結実した樹と全面的に結実しない樹が混在
- ・多:梢頭部から最下部にかけて全面的に結実
- ・極多:梢頭部から最下部にかけて全面的にブドウ状に結実

3)口針鞘数が1果当たり25本を超えるとヒノキ毬果が餌として不適となりカメムシがヒノキ毬果より離脱する傾向

4)各調査日における口針鞘数から離脱予想時期(25本/果に達する時期)を推定

5)離脱予想時期の県平均は、各調査日および口針鞘数の平均値により算出

※ヒノキ毬果における寄生虫数、口針鞘数は地形等により差が大きいため、各調査地点の結果が必ずしも当該地域全体の状況を示すものではない。

カンキツ

定期調査：8 圃場
調査日：7 月 18～22 日



定期調査圃場の様子

1. かいよう病

【概要に戻る】

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図 1、2 参照）

発生葉率：0%（平年 0%、前年 0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

発生果率：0%（平年 0.1%、前年 0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

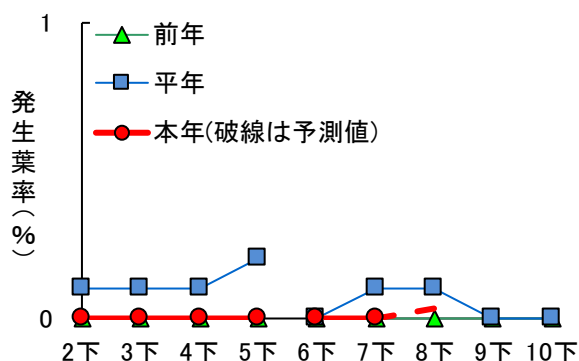


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

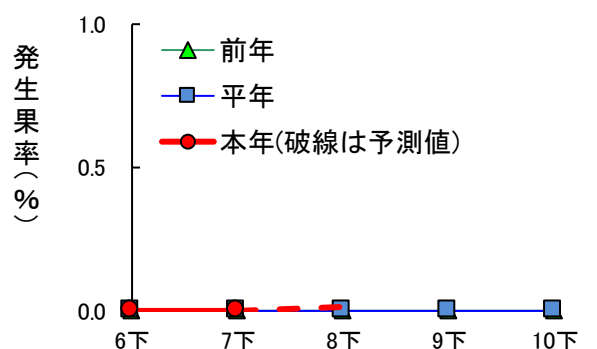


図2 カンキツかいよう病（果実）の発生推移

(2) 8 月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、はるみ等）の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅水和剤（クレフノン 200 倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は 20～25 日とする。

(2) 無機銅水和剤にマンゼブ水和剤を混用すると無機銅水和剤の防除効果が低下するので控える。

(3) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、強剪定は枝を遅くまで伸長させ、本病にかかりやすい期間を長くするため行わない。

(4) 台風の襲来等強風雨が予想される場合は、襲来 7 日前～前日までに必ず銅水和剤による防除を行う。

2. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図 1 参照）

発生果率：0%（平年 5.2%、前年 6.4%）

平年比：やや少（－～±） 前年比：やや少（－～±）

(2) 8 月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

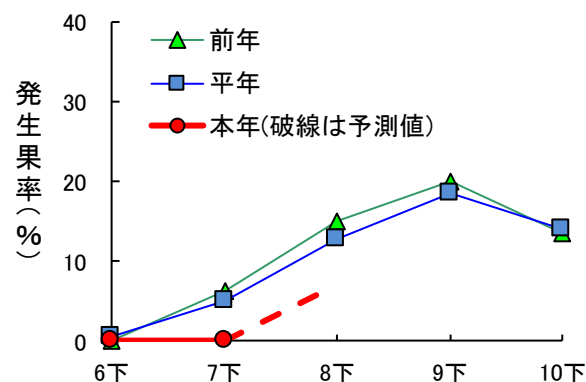


図1 カンキツ黒点病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、積算降雨量が200～250mmに達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次の散布を行う。
- (2) 枯れ枝や剪定枝は、伝染源となるため除去し処分する。園内に残った切り株は伐根するか、ビニルの袋などで全体を覆って病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：0.3%（平年2.8%、前年1.0%）

平年比：やや少（－～±） 前年比：並（±）

(2) 8月の気象予報

気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件（±～＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5～1頭未満）からの薬剤防除を徹底する。
- (2) マシン油乳剤を7月以降に使用すると果実腐敗の発生を助長したり、糖度の低下を招いたりする場合があるので使用しない。

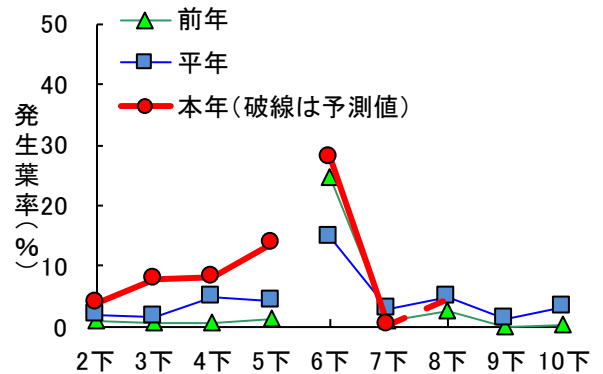


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

4. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生果率：0.1%（平年1.1%、前年0.5%）

平年比：やや少（－～±） 前年比：並（±）

② 黄色粘着トラップ（図2参照）

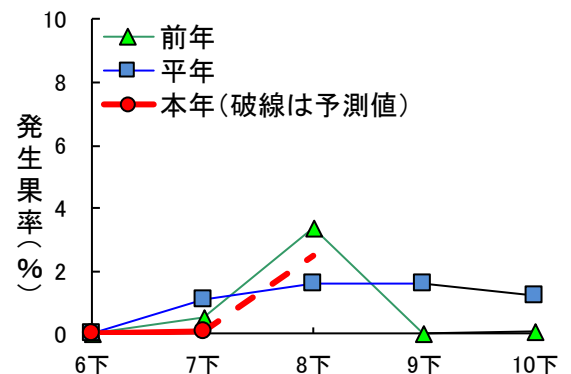
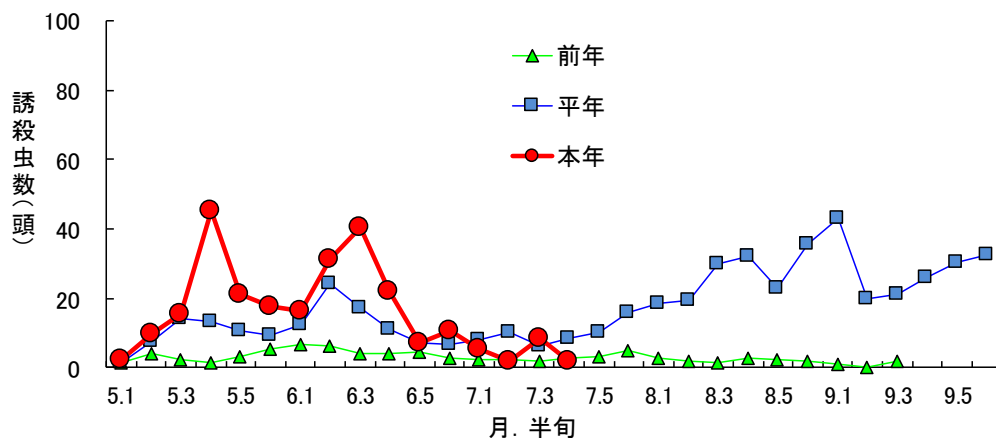


図1 チャノキイロアザミウマによる被害果の発生推移



平年比：並（±） 前年比：やや多（±～＋）

(2) 8月の気象予報

気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件（±～＋）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

ナシ 定期調査 (6 圃場)
調査日: 7 月 17 日



定期調査圃場の様子

1. ナシヒメシンクイ

【概要に戻る】

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① ナシ園地に設置したフェロモントラップ (図1 参照)

平年比: やや少 (ー~±) 前年比: 並 (±)

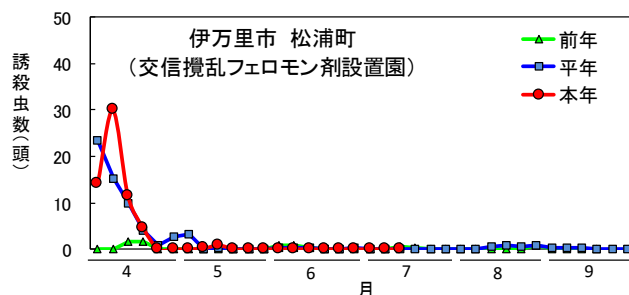
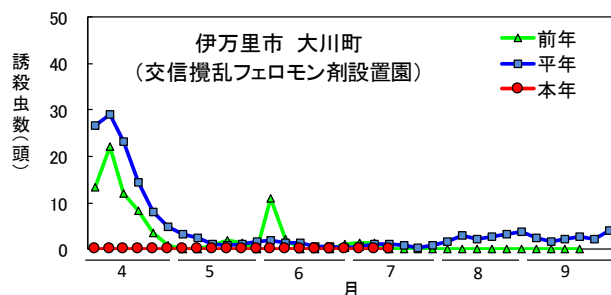
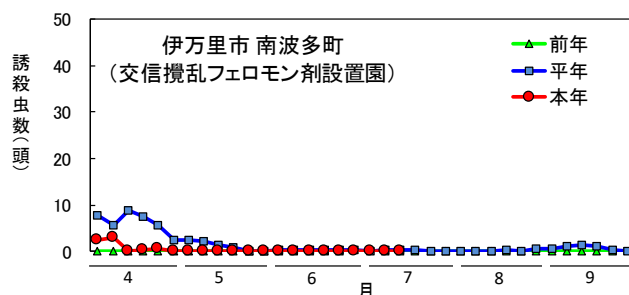
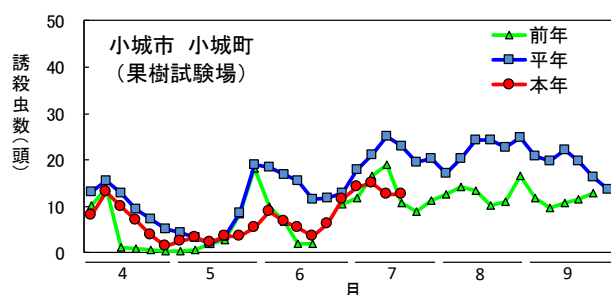


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺数の推移
(果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査)

② サクラに設置したフェロモントラップ (表1 参照)

伊万里市3ヶ所での7月第1半旬から第3半旬までの誘殺数は過去3年間の値よりやや少ない (ー~±)

表1 サクラに設置したフェロモントラップにおけるナシヒメシンクイの誘殺数 (頭)
(西松浦農業改良普及センター調査) ※7月1~3半旬の合計値

地点名	H28年	H29年	H30年	R1年
伊万里市 南波多町	0	0	0	1
伊万里市 大川町	27	17	13	6
伊万里市 新天町	50	38	108	33
計	77	55	121	40

(2) 8月の気象予報

気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 使用する薬剤の選定 (収穫前日数や汚れ) には十分注意し、収穫まで7~10日間隔で薬剤散布を行う。
- (2) 交信攪乱フェロモン資材設置園においても、10~14日間隔で薬剤防除を行う。

(3) 防除薬剤として、合成ピレスロイド剤やネオニコチノイド系薬剤を使用するが、ネオニコチノイド系薬剤については、ハマキムシ類に対する防除効果が劣るので注意する。

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生葉率：1.8%（平年1.5%、前年1.5%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 8月の気象予報

気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) ハダニ類は高温乾燥で急増するため、低密度時（寄生葉率10%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5～1頭未満）からの防除を徹底する。

(2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

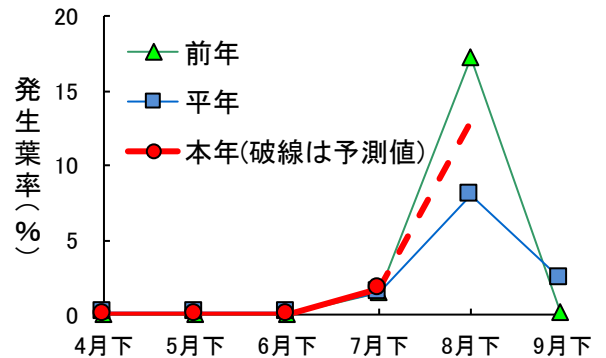


図1 ハダニ類のナシでの発生推移

ブドウ

定期調査（6圃場）
調査日：7月17～22日

1. ベと病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生葉率：5.0%（平年6.0%、前年6.2%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 8月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除効果を高めるために、棚面の上からも散布する。

(2) ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本系統薬剤は本病の防除には使用しない。

(3) その他については、特記事項を参照。



定期調査圃場の様子

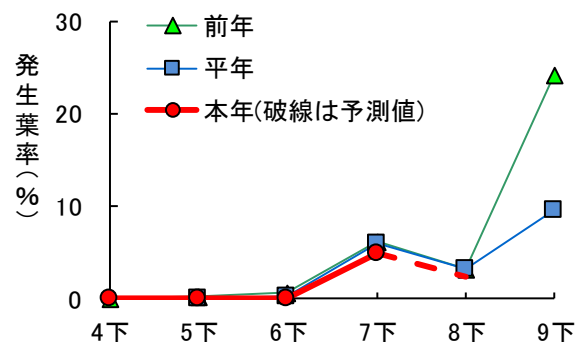


図1 ブドウベと病の発生推移

茶

定期調査：7圃場
調査日：7月18～22日

1. カンザワハダニ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）



定期調査圃場の様子

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率: 3.6% (平年 0.4%、前年 0.7%)

平年比: 多<+> 前年比: 多<+>

(2) 8月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件<±~+>

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤は年一回の使用とする。

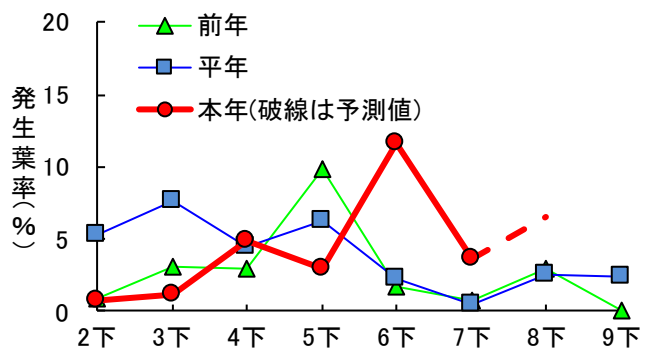


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

2. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

20回たたきおとし虫数: 19.4頭 (平年 15.2頭、前年 20.1頭)

平年比: やや多<±~+> 前年比: 並<±>

② 吸引粘着トラップ (図2 参照)

平年比: やや少<-~±> 前年比: 並<±>

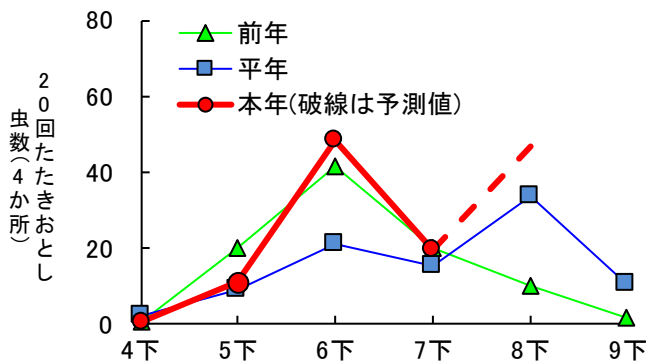


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

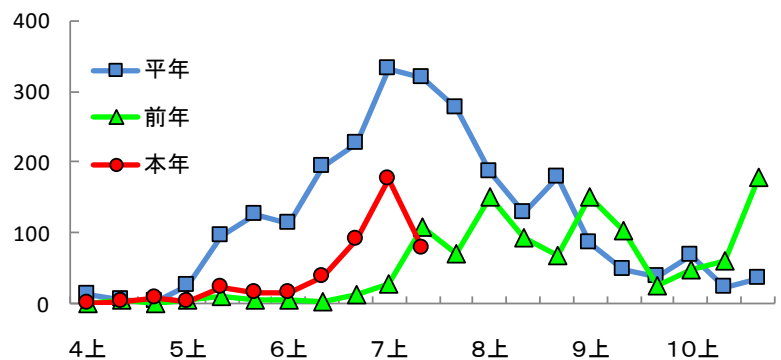


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移 (嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

(2) 8月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件<±~+>

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照。

3. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

20回たたきおとし虫数: 2.6頭

(平年 2.3頭、前年 1.9頭)

平年比: 並<±> 前年比: 並<±>

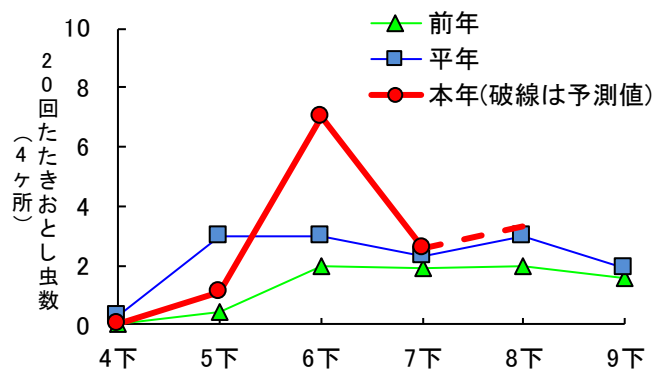


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

(2) 8月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件〈±～＋〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

4. チャノコカクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

被害葉数：1.9枚/m²（平年2.4枚、前年3.7枚）

平年比：並〈±〉 前年比：やや少〈－～±〉

② フェロモントラップ（図2、3参照）

平年比：並〈±〉 前年比：やや多〈±～＋〉

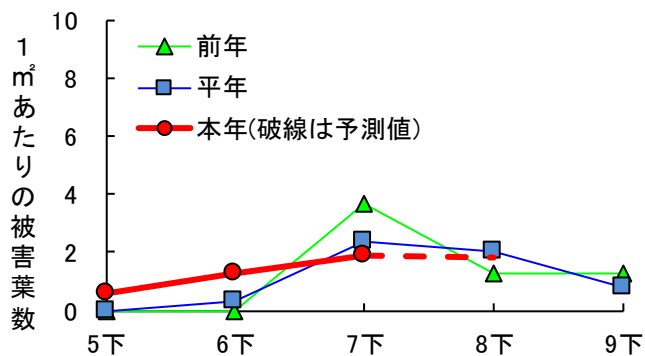


図1 チャノコカクモンハマキの被害葉数の発生推移

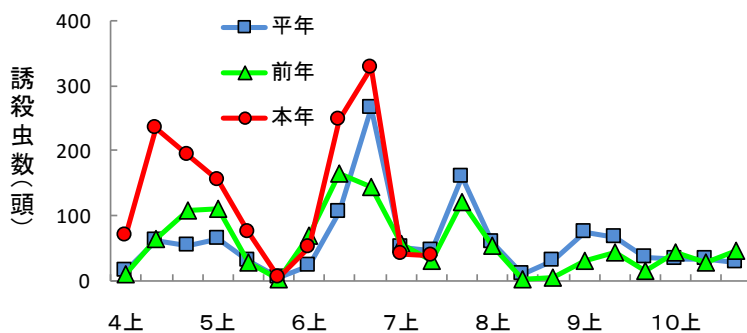


図2 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの旬別誘殺数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

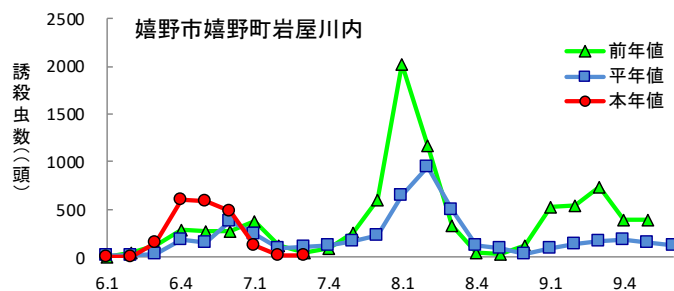
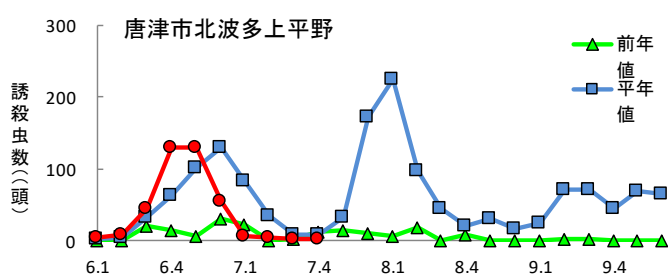


図3 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの半旬別誘殺数推移(唐津市・嬉野市、防除員調査)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 8月上～中旬頃が重点防除時期である。葉がつづられると防除効果があがりにくいため、発蛾最盛期から7～10日後に防除を行う。

5. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図1 参照、H30 より 5 月調査追加)

発生葉数 : 4.7 枚/m² (平年 4.4 枚、前年 0 枚)

平年比 : 並 (±) 前年比 : やや多 (±~+)

(2) 8 月の気象予報

降水量が平年並で、並発生条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病は雨滴により新芽に感染するため、開葉初期の予防散布を実施する。

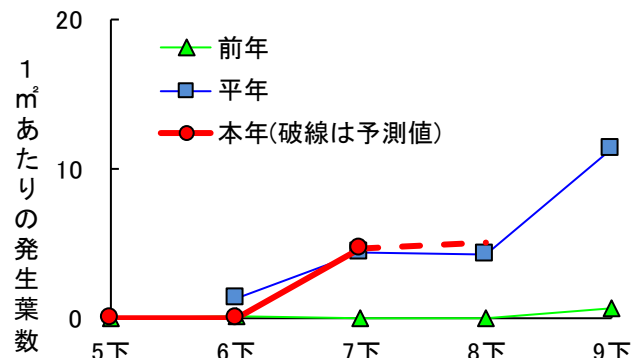


図1 炭疽病の発生葉数の推移

連絡先 : 佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougijutsu@pref.saga.lg.jp